

アイレベルだけではない 横移動の効果



③その場でレンズを左に振って落ち葉を中央に入れる
最後にレンズのアングルを調整し、落ち葉を画面の中央に配して完成。横の動きとその場でのアングル調整の合わせ技が奏功した一枚だ。



②右に移動して重なりを調整
二股になったシルエットの間に落ち葉が来るように横移動をした。しかし、それだけでは落ち葉の位置が画面の端に配置されるため、まだバランスが悪い。



①元の位置:落ち葉と枝が重なっている
頭上の枝に引っかかった落ち葉を発見。この場面を発見した位置では、落ち葉が背景に見える枝のシルエットと重なっている、このままではバランスが悪い。



撮影状況(合成)

頭上の被写体に対する水平移動

頭上の被写体にも横方向の動きは活用できる。ここではわかりやすくするために横の動きに絞って説明しているが、実際に頭上の被写体をフレーミングするには、左右や縦横を意識することなく平面的に動くことが多い。

[撮影データ・共通] SONY α7R/70-200mm F2.8G/f5.6AE (1/200秒)/ISO 100/RAW/WB:太陽光/カラーモード:風景/東京都調布市/'14年1月16日



①影が木に隠れている

影が木の背景に隠れている状態。順光が当たっているため、木自体も平板な印象に見えてしまい、面白さが伝わらない。

[撮影データ・共通] SONY α7R/70-200mm F2.8G/f5.6AE (1/160秒)/ISO100/RAW/WB:太陽光/カラーモード:風景/東京都調布市/'14年1月16日



②右に動くと影が見えた

少し右へ移動してみると、背後に隠れていた影が見えてきた。木自体と影が鋭角に組み合わせることで、面白さが生まれている。



③さらに右へ動いて影の角度を調整する

さらに右へ移動。影が45度の方向に伸びたことを利用して、影の先端を画面右角に配置。画面効果の高い構図となった。



④試しにさらに右へ動いてみる

影が地面側に倒れ過ぎて、③と比較すると、どこか中途半端に見えてきた。横移動のし過ぎと判断。

足下の被写体に対する横移動

足元の被写体の代表格といえる影が、横移動によってどのように効果を発揮するかを実験的に探ってみた。



撮影状況

特に三脚を使って頭上の風景をしっかり撮る場合、横移動によってフリーミングを調整するのが面倒かもしれませんが、やっただけの結果は必ず付いていきます。あきらめずにトライしてほしいものです。

ところがズームレンズが主流になって以降、最初に決めたポジションからズームを使って撮影するだけで、縦や横にフットワークを駆使したカメラポジションの工夫が疎かになっているという指摘がありますが、それはとてももったいないことをしていると考えるでしょう。

特に近距離の撮影では、わずかな横移動でも、今見えている以上に美しくバランスのとれた世界が見えてくる可能性があります。

逆には、足元や頭上の風景においても高い効果を発揮できるのです。特に近距離の撮影では、わずかな横移動でも、今見えている以上に美しくバランスのとれた世界が見えてくる可能性があります。

横の移動というと、直感的にアイレベルでの平行目線で被写体を捉えている状況が浮かぶかもしれませんが、それだけではありません。足元の風景であっても、頭上の風景であっても横移動の効果は等しくあります。先に遠景の風景では横移動の効果が発揮し切れないと述べましたが、

横方向の動きを空間的に活用する

逆に足元や頭上の被写体は距離が近いので、効果が高いと言えるのです。状況写真を見ていただければわかるように、足元にしても頭上にしても被写体までの距離は数メートルの場合が多いので、横移動を行えば左右の位置関係を変えることは容易です。もちろんマクロ域において絶大な効果が上がることは述べたとおりですが、足元や頭上の風景においても高い効果を発揮できるのです。